時評

飾り気の無さ

屋良健一郎

『短歌年鑑』平成三十年版（角川書店）には恒例のアンケート「今年の秀歌集」の結果が掲載されている。平成二十八年十月から二十九年九月までに刊行された歌集から歌人たちが投票、三枝浩樹『時禱集』（角川書店）が最多の三十四票を獲得した。この歌集は「第二十二回若山牧水賞」受賞も決まっている。

・いちめんの大豆畑にしずみゆきゆうひは時をゆるやかにする
・冬の日の日向に拾う石ひとつほのかなれども手にあたたかし
・和の食にこころ寄りゆく夏の夜のわけても白き豆腐旨しも

一首目、緑まぶしい畑が夕日の色に染まってゆく。昼から夜へ変わる頃、時間の流れもゆるやかになるという歌。スケールの大きな歌で、ひらがなの多用がおおらかさを生んでいる。二首目は拾った石が温かいという何でもない歌なのだが、ハ行音（特に上句に四回出てくる「ひ」）の響きのためだろうか、端正で美しい一首になっていると思う。三首目、豆腐の白さが夏の爽快感と調和しているが、なにより和食を「和の食」とした言葉の使い方に惹かれた。二首目も三首目も飾り気のない歌だが、言葉の連なりのなだらかさや優しい響きによって印象深い作となっている。収録歌数もそれなりに多い歌集でありながら、あまりボリュームを感じさせず、さらっとした読後感を得られるのはそういった飾り気のなさや歌の作りによるのだろう。前述のアンケートで松村正直が「これ見よがしなところがなく歌に静謐さが漂うところに惹かれる。」（『短歌年鑑』一七九頁）と書いているが、私の感想もそれに近い。

・図書館の書架をながめる時の間のこのしずかさに大学はあり
・神の手のなかにあるかと思うまで餌を啄みて小鳥はあそぶ

図書館の中の静かな空間。館の外はきっと人通りも多くにぎやかなのだろうし、館内でもこの書架以外の場所ではあるいは話し声もあったりするかもしれない。しかし、「このしずかさに大学はあり」という断定によって、作者のいる空間（書架の前）の静けさがそこのみに留まるのではなく広がり、一首全体をあるいは世界を満たすような感じもしてくる。二首目、「神の手のなか」という表現により、何にも気兼ねすることなく自由に動き回る小鳥の様子と、それを前にしている穏やかな時間が感じられる作となっている。一首目も二首目も空間の切り取り方に優れていて、眼前の世界を真空パックし、読者に届ける歌だと思う。

この歌集には挽歌も少なくないが、その中でやはり最も印象的なのは母を詠んだ作である。

・ひととせの時はめぐりて母のなき暮らしの隅に菜の花は咲く
・歳月のなかにしずみてゆく母をふとゆりおこす今朝のやまなみ
・おのずから胸に浮かびてとどまればしばし秘密のごとく母恋う

「暮らしの隅に」咲く、「歳月のなかにしず」むという表現が詩的で惹かれる。三首目の「母恋う」の率直さが潔くて温もりを感じる。

飾り気のない言葉が、定型におさまりなだらかに連なることで、静謐で優しい時間が読者に差し出される、そんな歌集だ。